

スポーツ実況 瞬間を共感に

NHKチーフアナウンサー

内山俊哉

ニュースを読む、番組でリポートをする、ステージで司会をする。私たちアナウンサーが、さまざまな業務を担当する中で、スポーツ実況は、いささか特殊性が強い分野かもしれません。最大の特徴は、表現のほとんどを「即時描写」が占めていること、つまり「予め用意された原稿がない」ことです。

スポーツ実況は、コンマ数秒単位で変化するプレーに遅れることなく、現象を描写することから始まります。ラジオ実況の一例。「ピッチャー、投げました、打ちました、サードゴロ、一塁へ送球、アウト」。新人アナウンサーが初めて野球を実況すると、こうした「点描」になりがちです。目で見て頭で状況を理解していても、即座に言葉に表すのは難しいものです。しかも、一連のプレーはあつという間。この程度の表現でも、初めは「アー、エー」とまごついてしまい、動きになかなか追いつけません。「車窓の風景を片っ端からしゃべって、練習しろ」。新人時代、私も先輩から教わったものです。

せん。

実は、私には「日本、金メダル」の実況経験がありません。一方で、金メダルが期待されながら、届かなかった場面を何度も実況しています。銀、銅のメダルは、世界トップレベルの勲章なのか、金を逃した残念賞なのか。選手によって受け止め方はさまざまで、視聴者の反応も同様です。伝える側には、「おめでとう」一辺倒とはいかない表現の難しさがあります。

二〇〇八年の北京五輪もそうでした。私は団体二連覇と、富田洋之選手の個人総合金メダルが期待された体操男子の実況を担当しました。しかし、団体では中国に及ばず、銀メダル。個人総合も中国選手が金、富田選手は器具の不具合など、アクシデントもあって四位、メダルを逃しました。そうした中で、十九歳（当時）の内村航平選手が個人総合で銀メダルを獲得したのです。

表彰式が始まりました。「この銀メダルをどう伝えるべきか」。生放送を続けながら、言葉はなかなかまとまりません

経験を重ねていくうちに、最低限の描写に加え、プラスアルファの情報を言えるようになってきます。先ほどのサードゴロは、こう表現されるプレーだったかもしれない。

「ピッチャー〇〇、サイドハンドから第三球を投げました、スライダー。打ちました、いい当たり！三塁線のゴロ。サード、横っ飛び、捕りました！起き上がって、一塁へ送球！きわどいタイミング、一塁は、アウト！サード××のファインプレー！」。

文字に起こせば、台本のようですが、もちろん予めノートに書いておくわけにもいきません。事実関係は同じサードゴロでも、臨場感と情報量の差は点描と実

でした。内村選手は初めてのオリンピック。大躍進の銀メダルであることは間違いない。しかし、日本体操陣が目指した金メダルではない。そして、本来表彰台に立つべきエース富田選手の姿はない。喜びと無念さが入り混じる中、場内に「シルバーメダリスト、コーヘイ・ウチムラ」と内村選手が紹介されました。大きな拍手と歓声を耳にした瞬間、次の言葉が私の口から飛び出しました。

「これから長く、長く、コーヘイ・ウチムラの名前が世界にアナウンスされるでしょう。十九歳で、今大会二つ目の銀メダル。アテネから北京へ、そして北京

況の違いがおわかりいただけるでしょう。スポーツ実況は、視聴者のイメージを競技場に誘うものでなければならないと、私は思います。ただ、単にテンポよく、早口で伝えればいいわけではありません。聞き手の理解や感動を妨げる早口、情報量過多の実況は、アナウンサーの自己満足に過ぎないからです。

スポーツを見る目を養い、価値基準、情報の優先順位を体得する。その上で、簡潔で、わかりやすい言葉、ふさわしいトーンでプレーを描写し、勝負のドラマを伝える。かれこれ二十年以上スポーツ実況に携わっていますが、いまだに試行錯誤が続いています。

「前畑ガンバレ」「飛んだ、決まった」「栄光への架け橋だ」。諸先輩方の実況の言葉は、名文句として語り継がれるものが少なくありません。オリンピックなどの世界の桧舞台で、日本の金メダルの瞬間に立ち会い、自分の言葉で感動を伝える。スポーツ実況を志すアナウンサーなら、誰もが夢見ることもかもしれません。

からロンドンへ、夢をつなぐ、十代の大活躍でした」

世界が新星の誕生を祝福している。拍手と歓声をそう受け止めた私は、銀メダル獲得という事実を、弾んだトーンでコメントしました。そして「アテネから北京へ、北京からロンドンへ、夢をつなぐ」の部分に、無念さと、次こそは金メダルをという期待感を込めたつもりです。準備も推敲もなく、咄嗟に出た言葉でした。今思えば、もっと適切な表現があったかもしれません。しかし、大会後、視聴者や関係者から温かい反応をいただいたことは、望外の喜びとなりました。

「二度とないその瞬間を、長く視聴者の皆さんに共感してもらう」。私の究極の目標はそこにあります。そのためには、言葉の巧拙を超えたヒューマニティーが求められるのではないのでしょうか。見果てぬ夢を追いながら、私はこれからもマイクに向かいます。「ホームラン！」「シュート！」「決まったー！」何の変哲もない言葉に、あふれんばかりの思いを込めて。



内山俊哉
うちやまとしや

1964年、佐賀県生まれ。86年、NHK入局。アナウンサーとして東京のほか、福岡、佐賀、名古屋、松山に勤務。オリンピックは夏冬7回、ワールドカップは2010年南アフリカ大会まで5大会連続で現地から中継。現在の主な実況種目はサッカー、体操、野球（MLB）など。実況のほか、「Jリーグタイム」などの番組で随時、キャスターを務める。09年から解説委員を兼務し、大相撲などスポーツ全般のニュース解説も担当。